
冒険者かく語りき

玉藻&土鍋ご飯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冒険者かく語りき

【Nコード】

N4182Y

【作者名】

玉藻& a m p ·土鍋ご飯

【あらすじ】

今日もマイペースに進む角あり天然ノーム娘二人パーティ。二人の明日はどっちだ！

ウィザードリオンラインをプレイしていて実際に起こった事を膨らませて小説にしています。

PK怖い。助けてPKK。

原作としているウィザードリオンラインをプレイしていなくても楽しめる様に出来る限り固有名詞は入れず語らず、描写も心がけております。

リアルリリアさんが何と外伝を書いて下さいました！リアルとミユーの出会いやリリアの過去が語られている力作です。よかったらこちらもどうぞ！

<http://ncode.syosetu.com/n4816y/>

この「冒険者かく語りき」に問題あれば即削除致します。

2011/11/11 短編でアップしていたものをまとめました。今後はこちらに順次連載していく予定です。

内容は全く同じです。感想等も書いて頂いているので削除はしない予定です。

いと恐ろしき『人狩り』（前書き）

プレイしていて実際にあったことを物語風にしてみました。
ゲームなのに本当に恐怖を感じたのは久しぶりです。
PC前で叫びました。

いと恐ろしき『人狩り』

狭い通路が多い遺跡ダンジョン…

畏も多数仕掛けられており、初心者命を屠る事でも有名で、冒険を始めたばかりの冒険者は立ち入る許可も出されないその場所に、今日もまた一つのパーティーが足を踏み入れていた。

「リリア早くー」

「ミューさん待って下さいよー」

ノームの戦士ミューと僧侶リリアの女性二人のパーティだ。装備も整い初心者保護も解かれ、駆け出しながらも徐々に力をつけ、この遺跡ダンジョンもほぼ制覇した二人である。

新たなダンジョンへの立ち入りを許可されてはいるものの、まだ力不足の感が否めない二人は自分達の鍛練と日銭を稼ぐ為に、ここ数日気ままにギルドの依頼をこなしているのである。

今日も二人でコボルト退治をし、陽も暮れかける頃にノルマを達成したのであった。

「疲れたねー。早く街に帰る？」

「はいー。でもやっぱりミューさん強いですよ。強さの秘訣は守りを捨てた所ですか？」

「リリアが魔法で回復してくれるしね。安心して攻撃出来るってのもあるかな」

戦士並に装備が可能とはいえ、聖職者である僧侶は刃物は装備出来

ず重い鎧も装備は出来ない。あくまで打撃武器に頼る事となる。その為に戦士…しかも守りを考えず攻撃に特化した槍使いのミューの強さは非常にありがたいものであった。

後から段差を登るリリアに手を貸しながら、二人で帰路に着く。街に帰るまでは、いくら慣れた道とはいえ油断は出来ない。

「あ痛っ！」

「だーかーらー、リリアはなんで必ず罠にひっかかるかな。そこは道の端を通れば避けられるって行きでも教えたじゃん」

「だって。モンスターの攻撃があるかもって周り見ながらだと、そこまで気を配ってられないですし…」

「うちらだけじゃなくて、シーフもいたらいいんだけどね…。中々いい人も見付からないしねー」

盗賊…シーフの職業であれば、宝箱の罠を解除したり、モンスターの隙をついたりと中々トリッキーな動きをしてパーティーを多いに助けてくれる。

ただ、単独で冒険するには辛く、街でも見掛ける事は少ない。見掛けたとしても既に他のパーティーや、冒険者同士の集まり（ユニオン）に登録していて参加を募る事は中々難しい状態である。

「魔法使いもいたらいいんですけどね」

「行きに見掛けた人を思い出したの？私がああいう人だったら嫌よ。何か…凄い嫌いな気配したし」

今朝遺跡に入る際に、二人は入口で魔法使いとすれ違っていた。単独では魔法使いも冒険は難しく、それほどお目にかかる事はない。

しかもフードを顔も見えない程に目深に被り魔法使いのシンボルでもある魔法の杖を背中に背負い、挨拶も返さず足早に遺跡の奥に向かって行った姿にミューはあまりいい印象を持っていなかった。

遺跡に探索やギルドの依頼で向かう冒険者も数多いのだが、今日はほとんどすれ違う事もなく、二人共にこの魔法使いは強く印象に残っていたのだ。

「回復魔法はまだ使える？大丈夫？」

「さつき簡易キャンプで回復したから大丈夫ですよ。ちょっと傷治したら行くから先に行ってて下さい」

「分かったわ。早くしてよねー」

「はい」

罾が設置してある狭い回廊を抜けた先のL字型の通路を曲がり、食虫植物が群生する広間に入る。

歩き廻る食虫植物は最早モンスターと同じく冒険者を攻撃する邪魔物であるが、この広間の食虫植物達は近くの虫でも食べているのか、特に襲いかかってくる事はなく、一種の安全地帯となっている。

「あんまり長居はしたくないけどね…ってあれ？」

一人先に広間にたどり着いたミューは、そこに他の冒険者のパーティーがたむろしているのを見付けた。何やら深刻そうな顔付きの面々を見て声をかけた。

「こんにちはー、どうしたんですか？」

「ああ…こんにちは。ここいらで『人狩り』が出たらしくてな…警戒してたんだ。」

「人狩りですか…！」

背中に巨大な戦闘用の斧を背負ったドワーフの戦士が苦い顔をしながら答えてくれる。

冒険者にとって忌むべきもの…『人狩り』。

モンスターを狙うのではなく、冒険者をターゲットにし、その財産…そして命を狙う冒険者の事だ。

本来モンスターに奮われるべきその力が同じ冒険者に向けられてしまえば、それは非常に強力な武器となってしまう。ギルドでも当然他の冒険者に対する攻撃行為を禁止しており、間違つて攻撃が当たつた程度ならともかく、もしも人を殺めてしまった場合は、街に帰れば衛兵に捕まり牢へと連れて行かれる。投獄された者は非常に長い時間の苦役が待っているという。

街と違い、ダンジョンの中では衛兵もおらず冒険者同士で自衛するのが基本である。単独で冒険するよりはミュー達や、このパーティの様に複数で行動し『人狩り』に狙われる隙を見せないという事も必要になってくる。げに恐ろしきは怪物よりも理性ある人であるというのが古来からの哀しい事実である。

「この遺跡では見掛ける事は稀だったし、それ程の脅威もなかったんだが…」

「そうなんですか…。しっかしリア遅いな。ちよつと連れが遅れてるので見てきますね」

「お嬢さんお気を付け下さいね。もしかしたらすぐ近くにまで『人狩り』が来ているかもしれせんから」

「大丈夫ですって。ついさっきもそこ通つたばかりですし。心づか

「ありがとうございます」

魔法使いらしき背の高い綺麗な顔立ちのエルフの男に優しく声をかけられるが今はリリアが気がかりだ。

傷を少し治す程度であれば、呪文の詠唱の時間を入れてもさほどかかるものではない。ただ、リリアは非常にそっかしい所がある為、迷宮の壁に引つかかってしまったり急にその場で一回転したりとまたワケの分からない事をして時間がかかっているのかもしれないと、ミューがL字型の通路を戻って見た光景は予想外のものではあった。

うつ伏せに地面に倒れ伏し動かないリリア。そしてその横に膝まづき、リリアの荷物を漁っているフードの姿。

今朝方入口ですれ違ったであろうそのフードの魔法使いは、浴びた返り血が蒸発し周囲に赤く漂い、殺気に満ちた目は興奮で赤く光り異様な気配を放っている。

「リリアっ!」

件の『人狩り』だと気付いたミューが剣を抜き、飛び掛かる。

ローブの魔法使いは落ち着いて立ち上がると杖を振りかざし何か口の中で呟いた。杖の先から赤い光の塊が飛び出しミューに直撃する。仲間がやられた事で頭に血が上り、冷静な判断が出来なかったミューにそれを避ける事は出来ず、まともに食らってしまう。それは火の魔法。自然には存在しない凝縮した火力に鎧の表面が焼け焦げる。モンスターの荒い攻撃とはこれはあまりにもレベルが違う。ダメージを受けた事で冷静になったミューは踏み止まると広間へ身を翻す。仲間の死体を回収し、安全に街まで運んで寺院で生き返らせてあげたい。また、今日の戦利品を盗られてしまうは非常に悔しいし、仇も取りたい、しかしこのままでは自分もリリアの二の舞になってしまう…。そう判断したのだった。勿論感情的には到底納得は出来て

はない。

先ほどの広間に走って飛び込むと、物音と蒼白になったミューの顔で起こった事を理解したのか、先程の三人組の内の一人の小柄なボーグルが剣を抜いて入れ替わる様に通路の方へ走って行ったが、直ぐに戻って来るとそのまま遺跡の入口へ向かい走り始めた。

「駄目だ！おいらの技も全く齒が立たない。逃げるが勝ちだぜ」

「お嬢さんも逃げて下さい。うちのシーフの判断は外れません」

「でもっ！リリアが…」

「諦めるんだ嬢ちゃん。レベルの違いを見ただろう」

そう言っただけで足早に入口に去って行く三人。

そして、革靴のコツン…コツン…という音が 逡巡してたミューの耳に聞こえてくる。

「ひっ！」

思わず息を飲み立ち竦む。

先程の魔法使いが禍禍しく赤いオーラを身に纏い、広間に入ってきた。ミューに向けてゆっくりと杖を振り上げる。

咄嗟に広間の奥に飛び込み地面に倒れ伏したミューの背中を火炎の残滓が舐めていく。

恐る恐る密集していた食虫植物の間から顔を上げたミューは今度こそはつきりと悟った。

ギルドの依頼でよく頼まれる害虫駆除に指定されている人間の全長程もある巨大な蛾。戦い慣れてきたミューとリリアの二人でも数回攻撃を加えなければ絶命させることは出来なかったその巨大な虫は、今の炎を浴びて一瞬で絶命していた。しかも数匹まとめて。

これほど強力な魔法はミューもまだお目にかかった事はない。そして、今の自分ではどんなに頑張っても勝ち目はない。

「リリア…ごめん…」

ミューはそう呟くと、冒険者に支給されている脱出装置を作動させた。街への緊急転送装置である。

これは一日に約一回しか使用出来ず、本当に緊急用である為出来る限り使わないようにしていたのが功を奏した。

転送される直前にミューが思わず流した涙が地面に残るも、火炎の魔法の熱によって瞬く間に消えて行く。

涙で濡れた地面が跡形もなく乾いていく様は、未熟な冒険者が入れ替わり立ち替わり来ては消えて行くダンジョンの掟そのものであるかの様であった。

いと恐ろしき『人狩り』（後書き）

登場人物の名前は変えてあります。

別パーティがいたのや、戻ったら仲間が殺されていたのとかその辺りはほぼそのままです。

後で無事に蘇生したパーティの仲間と街で合流して二人で怯えておりました。

でもこの臨場感はちょっと病みつきです。

初めは日記でも書くつもりが、結構頭の中で誇張されたのでそのまま小説にしてみました。

求道者イナナ (前書き)

前回投稿したものが結構好評だったので思わず書いてしまいました。
サブキャラのエルフのメイジの話です。
今回も実体験を元にしています。

求道者イナンナ

「生憎とそんな風体の男はゴマンといるからねえ。見たかも知れないけどいちいち覚えちゃいないよ」

「そうですか…。ありがとうございます」

「お嬢さん、随分探してるみたいだけど、あんたのいい人かい？」

「いいえ…ただ…」

「ただ…？」

「私の心の師とっております」

今日も宿屋で、酒場で、あの人の事を訪ねても何も分からなかった。そう呟き溜息をついたイナンナは冒険者ギルドの横の酒場から階段を降りようとして、ふと噴水広場へ目をやった。そこで露店を開こうとしているドワーフに目を奪われる。

「違う…。あの人ではない…」

背中に巨大な戦斧を背負い、売り物として装備品や火打石等を鞆から出していたドワーフの戦士はイナンナの探している人に似ているものの、やはり違う人物であった。

探し続けてどの位の期間になるのか。腰近くまである自らの長い髪が風に優しく遊ばれるのを見詰めながら、イナンナはあの人を想った。

求道者イナンナ。

そう呼ばれ、周りから孤高の存在として見られていた彼女は孤独な存在だった。

エルフとして生まれ持った美貌だけでなく、知性に彩られた瞳は見る者を魅了し、そして動く度に揺れる長い銀色の髪は光の煌めきの様であると、冒険者仲間からも遠巻きに見られていた。
そう…遠巻きに。

エルフの冒険者自体はこの街では珍しいものでもなく、冒険者見習いを教育しているのもエルフの戦士であったりする。

別にエルフだから知性に溢れ、他者を排除する孤高の存在…と言う訳でもなく、他の冒険者と同じ様に笑い傷つき、そして日々を暮らしている者がほとんどだった。

だがイナンナは別だった。

元より魔法の才に溢れ、そして飽くなき探求心で知性を磨き、同じエルフの中でも非常に聡明な部類にいた彼女は同時に孤独であった。誰かに陰で何かを言われても忸える事もなかった彼女だったが、友と呼べる人もおらず、心の内を語れる親しい仲間も恋人もいなかった。

落ち着いた物腰と話し方で見た目よりも年嵩に見られる事の多かったイナンナは、それを活かし早々に故郷を旅立った。

元より近しい縁者もおらず、息苦しいだけだった故郷に未練はなかった。

何かを追い求めるように冒険者となった彼女だが、冒険者となりギルドに登録してもその孤独は癒えなかった。

冒険者としての経験はなくとも強力な魔法をある程度使え、見た目も麗しい彼女に人気は集中したが、皆遠巻きに見ているだけで彼女に声を掛けてくる者はなく、また彼女自身も孤独に慣れ過ぎていた為に、自分から声を掛けるといふことは出来なかった。

そうして周りがパーティを組み、少しずつ経験を積んでいく中で、イナンナは単独で下水道の探索を終えようとしていた。

迂闊だった…。

ギルドからの依頼により、魔法で結界に閉じ込めた盗賊の首領を倒す様言われて来たのだが、下水道のダンジョンの奥まで進んでも肝心の結界は封印されたままであり、そこにあった張り紙によると、封印を解除したければ螺子を集めてこいとの事。

ここに至るまでに、虫の大群を倒したり、生ける屍を燃やしたり、さらにはガス状の毒を吐く生物を倒したりしたが、螺子の様なものが落ちている気配はなかった。何か見落としはないものかと先程倒したコボルトより入手した地図と入口で拾った地図を突き合わせて思案に耽る。

と…そこではたと思い当たった。

このダンジョンの名前にもなっている『下水道』。その『下水道』部分にまだ侵入していなかった事に。

確かガス状の生き物がいた付近の下側にも道が続いていた様に記憶している。そこが侵入すべき場所ではないのかと気付いたイナン

ナは腰のポーチに地図を仕舞い、杖を構えながら歩き始めた。少し道を戻った所のコボルトの住処で、巨大な斧を構え息も荒く立ち尽くす男を見てイナンナは足を止めた。

自分よりも背丈は小柄ながらも筋肉で詰まったドワーフの戦士の身体はイナンナを驚かすのに十分な迫力を放っていた。

そればかりでなく、返り血を浴びて赤く染まった身体に、足元に横たわる他の冒険者の身体。

「噂の『人狩り』……」

思わず声に出して呟いてしまったイナンナの声を聞き付けたドワーフの戦士は、殺気が籠った赤く血走った目をイナンナに向け、杖を抜いたその姿を認めると、いつでも攻撃が出来る様に斧を振りかぶった。

他の冒険者を攻撃する『人狩り』に対して、一般の冒険者が攻撃を加え、あまつさえ命を殺めてしまっても罪には問われない。

目には目を歯には歯を、というものである。

横たわった冒険者の身体を中心に円を描く様にゆっくりと動く二人目線を外せば次は私の番になるだろうとイナンナは必至に力を込めて相手を見詰めながら杖を握る力も緩めない。この状態で呪文を詠唱する隙等ない。散々天才だのなんだの言われた所で、ダンジョンの中では経験の浅い一介の未熟な冒険者でしかないのだ。

と：そんな事を考え、相手のドワーフから目を離さないようにしていたイナンナは、そこがコボルトの住処であり、大量に物が散乱しているのを完全に失念していた。

「キヤッ！」

意外に可愛らしい声を上げて、イナンナは派手に転ぶ。
そして顔から地面に突っ込み、散乱した骨やら布の様なものに頭が
挟まってしまった。

傍から見れば尻を突き出した状態で地面にいきなり突き刺さった形
である。

本人としては異臭と、異性に尻を突き出した様な格好をしている事
で恥ずかしさと臭いとで頭がいつぱいである。
さっきまで対峙していた事も忘れて、必死に声を上げる。

「その人！申し訳ございませんが助けては下さいますか！」

「本当に危ない所をありがとうございます…」

顔を真っ赤にして消え入るような声で謝るイナンナに、唸り声の様
なしわがれ声で話すドワーフの戦士。

「こんな別嬪の尻もさわれたし、俺としては万歳ものだがな」

思わず膨れっ面になり、何か言おうとしたイナンナに指を突きつけ
話を遮る。

「だがな嬢ちゃん、忘れちゃいけないぜ。ここはダンジョンだ。初
心者だからって甘く見てくれるやつもいなければ、誰かが助けてく

れるかどうかも分からねえ所だ。自分で自分の身を守れないなら、経験をもっと積んで余裕が出てからでなきゃこんな奥まで来るんじゃないぜ。それと俺は札付きだ。関わらない方がいい」

コクコクと素直に頷きつつもイナンナは言葉を返す。

「でも、わたくしはここまで一人でやってこれましたし、これからも大丈夫ですわ」

「そういう甘い考えをしてるから初心者だって言うんだ。まだ死んだ経験もないだろう？すぐ傍のあの像に火も灯してない」

「でも…」

「でもじゃない。俺があんたを殺したら、誰かがこんな奥までやってきてお前さんの死体を回収してくれるか、入口まで魂が戻るか…ひどい時は死体をもっと奥まで運ばれてお仕舞めえよ」

さすがに無言になるイナンナ。

「でも…」

「だから…でもじゃねえって…」

「あなたは悪人には見えませんわ」

視線を外さないイナンナにドワーフの戦士は暫し呆気に取られた後、フツ視線を落とした。

「どうだかな…。俺の気が変わってお前さんを襲う前にさっさと消えな」

その言葉に立ち上がりながらイナンナは声をかける。

「イナンナです。お前さんでもお嬢ちゃんでもありませんから」

「鼻つばしらの強えこつて、俺はフェリングだ」

視線を逸らしながらポリポリと鼻の頭をかくこの男が、イナンナの目にはただ闇雲に人を襲う『人狩り』には到底見えなかった。

「ここですね…」

フェリングと別れ、炎が噴き出る罅を潜り抜け、地図でもまだ到達していなかった場所を発見する。

予想通り、下水道と思われる水路が目の前に続いている。正直非常に進みたくはないが、これも冒険者の務めと水に足を踏み込む。

予想以上の冷たさと、そして透明度のまるでない水のぬめりに怖気を奮いながらも、極力その事を考えないように足を機械的に進める。地図によると、この下水道の部分はそこそこの広さがあるようで、探索も骨が折れそうであった。

「はあ…。人形を探したり、ネックレスを探したり…。冒険者というよりはただの便利屋ですね…」

思わず呟きが漏れる。さすがに大分慣れた下水道のダンジョンとはいえここは未踏の地。疲れもかなり溜まっている様だ。

先程もフェリングに色々と言われたばかりという事もあり、頬を自分で張り気合いを入れるとイナンナは探索を開始した。

罅あり、生ける屍あり、巨大な蛙ありと、気が滅入る様な探索を続け、螺子と思われるものを数本回収した。

確かまだ数が必要だったはずと、探索を進めて行くと宝箱の横にガラクタが積まれている個所を発見する。確かあそこは調べていなか

つたと、宝箱を無視してガラクタを探ると案の定目的の螺子を発見する事が出来た。

下水に入る前に探索した部分でも見付けていた事もあり、これで揃ったと腰を上げかけた所で異様な気配を感じて背中がゾクリとする。その気配を探るべく、腰を屈めたまま辺りを見回すと、L字型の通路の奥から紫色の障気を纏った二足歩行の狼がゆっくりと現れる所だった。

「紫色の障気を纏ったモンスターには手を出すな」

ギルドで何度も言われた事だ。このダンジョンは基本的に初心者が探索を進めてもある程度までは問題のないモンスターしか現れず、初心者の保護が解かれるまで経験を積むものが多い。だが、この紫色の障気を纏ったモンスターは別格であり、何人もの冒険者が見習いのまま命を絶たれている。

見付かったら自分も先達の二の舞である。そう感じたイナンナは震える足をどうにか動かし、見付からぬ様に腰を屈めたまま静かに移動し始めた。

だが…。幾ら水のない部分とはいえ、基本は地下の下水道。そして生ける屍や巨大蛙の巣窟である。

もう少しで角を曲がれると安心した矢先に角からその屍が現れては、声を上げるというのが無理であろう。

思わず悲鳴を上げながらも目の前に蠢く本来死すべきモノを天に返すべく杖を振るい、下水に沈めた所で後ろから唸り声が聞こえてきた。

ハツとなり急いで振り向くと、二足歩行の銀色の毛並みの狼が今しも技を発動しようと拳を構えながらこちらに向かって来るところであった。

直ぐに角を曲がり、入ってきた下水の入口に向かおうとするも混乱した頭では慣れていない道で正しい方向も分からず、気付けば現在位置を見失う。狼は撒けたようだが、これではあまりに危険だ。そして走っている中で罨を幾つか作動させてしまい、身体が毒に犯され視界が霞み始める。

回復薬を飲みながら、朦朧とする頭でどうにか下水の入口を見付けたが、もうそこで限界だった。

ポーチに満載なのは、モンスターから奪った戦利品。癒しの魔法陣を発生させるキャンプ道具も、慣れた道だからと戦利品の為に捨ててしまった。回復薬も先程のもので底をついた。

一歩ずつどうにか歩を進めるも、身体は自由にならず、ゆっくりと水面が近付いてくる。

ああ…私はこうして孤独に死ぬのだと…回らぬ頭で考える。

神はいなかった。私の進むべき道とは一体何だったのだろうと意識が身体から離れる間際、最後に目に映った光景はバシャバシャと豪快に水を跳ね飛ばしながら突っ込んでくる巨大な足だった…。

イナンナが目を開けると、そこは街の寺院であった。外には噴水の広場があり、見慣れた光景である。

ここで蘇ったとなると、誰かが運んでくれないければ不可能なはず。

「気が付かれましたか」

「私は…」

まだ自分の身体ではない様な違和感の中、イナンナは声を出す。

「先程ドワーフの戦士様がやって来られてあなた様の遺体を置いて行かれたのですよ」

「その方はもしかして…」

「ええ…『人狩り』の犯罪者の方でございました。貴方様の遺体を置くと直ぐに我が寺院の前で衛兵に捕まって仕舞われました」

「捕まった人はどこに行くのですか？」

「スラム街の牢屋に入れられるとのことです。ただ…あそこは非常に治安の良くない場所。行く事はお勧め致しませぬ」

その声を背中に聞きながら既にイナンナはスラム街に向かって走り出していた。

鉄格子の狭い箱に入れられてフェリングは、俺もとうとう年貢の納め時かと頭の上で手を組み横になった。

随分と逃げ回り…そして随分と殺したもんだ…。

周りが囁し立てる様な声で騒がしくなった事に気付いたのは少ししてからだった。いつの間にか意識が飛んでいたらしい。ダンジョンじゃあ気も緩まなかったからなあと独りごちるフェリング。しかしあの鼻つばしらの強い嬢ちゃんには随分と和ませてもらったもんだ、と考えていた矢先にその考えていた人物が目の前に現れた。

「おいおい嬢ちゃん！何だってこんな所に？」

「イナンナです！フェリングさんなんで私を助けたんですか！そのおかげであなたがこうして捕まってしまっただけで…」

「遅かれ早かれ捕まるもんだったのさ。犯罪者の証が消えるまでは随分と時間がかかる。それまでずっと逃げ回れるもんでもないさ」

「でも…」

「でもじゃねえって言ったろ？」

「でも…私があんな無茶をしなかったら…」

「だからモンスターを倒すだけが経験じゃないのさ。そういつた知識も経験の内なんだよ。それが分かったんだし、二人とも生きてるんだからいいだろうが」

「でも…私を助ける理由があなたにはありません」

「目の前に困ってるヤツがいて、それを助けられない程腐ってはないつもりだ。それもこんな別嬪さんなら尚更な」

「フェリングさん…あなた本当は悪い事をしていないんじゃないですか？」

「さあてな…講釈は終わりだ…。よお、イナンナの嬢ちゃん。背中に虫がくっついてるぜ。ちよつと取ってやるからこつち背中向けな」

「え！嘘！取って！取って下さい！早く！！」

「落ち着けて…ホラ取れた」

「どさくさにどこ触ってるんですか！？」

「あ？講釈の代金だよ。6Gと別嬪の尻。まだ払ってくれるならもらうぜ。頂けるもんは頂くからな」

「もう知りません！払いません！」

「そうやってちゃんと感情を表に出せば人も寄ってくるだろうに…。嬢ちゃんもう行きな。幸せにな…」

そう言っただけでも払うかの様にシッシツと手を振ったフェリングはそれ以降一切喋らなかつた。

暫く何か言いたそうにしていたイナンナだったが、衛兵の無言の圧力もあり静々と去っていった。

「ったく…いい女だが…まだまだこれからが楽しみってとこだな」
去っていくイナンナの後姿を見つめながらどこか優し気に、そして寂しそうにフェリングは笑った。

ブリブリと怒りながら宿屋に帰り、いつもの簡易寝台ではなく怒りにまかせてスイートルームに泊ったイナンナは夜半の爆発音に起こされた。まあいいやとそのまま眠りに付き、爆発の真相を知ったのは翌日の瓦版を見た時であった。

【牢屋が爆発！犯罪者多数行方不明！？】

瓦版の周りに群がる冒険者や街の住人によると、昨夜スラム街の牢屋で爆発があり、捕まっていた犯罪者が脱獄したという事だった。慌ててスラム街に向かうも見物人多数な上に、厳戒態勢で近寄れず状況は瓦版以上の事は分からなかった。

「フェリングさん…」

あれから幾度も足を運んだが、フェリングの行方は様として知れなかった。

酒場や宿屋で色々な人に話を聞く内に分かった事がある。

フェリングは元々好んで『人狩り』をしたわけでなく、友の仇を討つために探し続けていた相手が刑期を終えており、それを倒し仇を果たした為に犯罪者になってしまったそう。また、迷宮内でも犯罪者『人狩り』だからと襲いかかる冒険者を返り討ちにしていただけであつて、自分から襲う事は一切なかったという。

イナンナは思う。

フェリングに出会わなければ自分は今ここにいないだろうし、もし順調に探索を進めていたとしても必ずどこかで野垂れ死んでしまい、きっと死体も残さず消滅していただろう。

それを何だかんだ言いながら身を持って教えてくれたフェリングにはどれだけ感謝してもきれない。

もうこの街にはいないかもしれない。いても結局憎しみの連鎖で誰かに狙われて、また『人狩り』の仲間だと襲撃されているかもしれない。ただ、自分は今度こそ彼の力になりたいと思う。

あの人の様になりたい、あの人の傍にいたい。これは恋なのだろうか、憧れなのだろうか…。自分でも分からないけれど、ただもう一度会いたいのだ。

また優しい風が吹き抜けた。ドワーフの戦士は露店を開始した。

そつだ、神に祈る聖職者の道もいいがやはり私は孤高の存在でいよう。

あの人にこの想いが風に乗って届きますように。

く風よあの人に届いていますか

求道者イナンナ（後書き）

少し感動を壊しますが、初心者の保護があるうちはPKされず、PKされない、物も盗まれない…というのを本当に失念していたのは作者である私もそうです。

だからイナンナさんが攻撃を食らう事はないはずですが、そこは殺気だったフェリングさんを見て気付かなかった…ということにして下さい。

挿絵：> i 3 5 4 7 4 — 4 4 6 3 <

カボチャ精霊と花火大会（前書き）

何だかんだで読んで頂ける方が多くて嬉しい悲鳴です。本当にありがとうございます。

11月7日、ゲーム内の某所で行われた花火大会の模様の実録が物語の後半に入っております。セリフはほぼ参加者の皆様が実際に話した事があります。作者の妄想ではありません。乱心していません。参加してくれた方々ありがとうございました。

カボチャ精霊と花火大会

「何か…外が騒がしいな…」

眠い目をこすりながらミューは簡易寝台から起き上がる。

昨夜は遅くまで遺跡に潜り、食虫植物を退治したり、幽霊の依頼の為に墓を探したりしていたのだ。

長い時間走り回ったり奥まで行ったりしていたので普段以上に疲れでしまい、昼近くまで寝てしまっていたのだ。

「おはようございます〜」

「もう昼近いよミューちゃん」

「ふあ〜ああああ。そうですねー」

2階から下り、顔馴染みとなった女将を振り返りもせず挨拶する。

昔は冒険に出てもまともお金を稼ぐ事が出来ず、好意で無料にして頂いた馬小屋に泊めてもらっていたのだが、寝心地は決して良いものではなく体調も万全にはならない為、そこそこに稼げる様に成長してきたからは部屋をグレードアップしたのであった。ゆくゆくは天下のロイヤルスイートの部屋に泊まるのだ…というのがミューの密かな夢である。ちなみにロイヤルスイートの部屋に泊まる金額があれば鎧が一領余裕で買ってしまうのだから、その贅沢さは推して知るべしというものである。

「あ、そーだー女将さん。外が何か騒がしかったけど…ど…わあああああ魔物!」

街中であるにも関わらず思わず背中に背負った愛槍を抜き放ち構え

る。

本来宿屋の愛想のよい女将がいるべき場所には、人の大きさを超える鎌を持った死霊の姿があったからだ。

冒険者が人に危害を加えては犯罪である。冒険者でなくとも勿論ではあるが。街中で自分に魔法をかける為に触媒の魔法の杖や、短剣を抜き放つ者もいるが、抜刀音が聞こえるとやはり身体は構えてしまふ。これを無意識に聞き流す様になるのも、ある種の熟練の証でもある。

気合いの一撃を放とうと、後ろ足に力を込めかけた所でミューを止める声が聞こえた。

「ミューさんダメー！それは女将さんだよー！犯罪者になるよー！」

「へっ…？」

聞き慣れたりリアの声に思わず力を抜くと、全く表情の変化は分からないが安堵したのか宿屋の受付にいる魔物は鎌をゆっくりと下ろすと聞き慣れた女将の声で危なかったと漏らしたのだった。

土下座せんばかりに謝るミューを笑って許してくれた魔物もとい女将さん。どうやらこういったやり取りも毎年恒例らしい。非常に人騒がせである。

毎年恒例ハロウィン祭

街全体がカボチャや魔物に扮した仮装をする。

食事を奢ってくれというリリアに連れられ酒場に向かいながら説明される。ちなみにリリアも今年初めての祭であるが早起きしたから知っているというだけである。

カボチャ頭の精霊がこの時期に各地に種を蒔く…というのが本来の祭らしいのだが、今年は何故か精霊が種を下界に落としてしまったらしく冒険者にそれを依頼しているそう。ちなみにギルドは一切関与していないとの事。

衛兵まで骸骨の魔物に仮装しており、おっかなびっくりしながらミュー達は酒場へ到着する。

「定食大盛りとケーキのダブルお待ちどうさまです！」

「さあさあミューさん、今日は私の奢りですからジャンジャン食べて下さいね〜」

「ちよつと…！リリア頼み過ぎでしょ！どこにそんなお金あったのよ！大丈夫なの！？」

「ふふー。偵察に行った大蔵で宝箱いっぱい見付けたり、他のパーティと一緒に魔物倒してウハウハなんですよ〜」

よく見れば、装備している鎧や盾も一通りグレードが上がっている。数日別行動している間に随分と稼いだ様子だ。先日『人狩り』に襲われたからかなり気落ちしている様子でほつといて下さいとまで言われたのだが、まさか修行をしているとは…ミューは元気になっっているリリアに安心しつつも、自分と差がついてしまった事に少しやきもきする胸を抑えながら定食に手を伸ばした。

ここの酒場のドワーフの店主が作る豪快且つ繊細な料理は、冒険者達にも人気である。先日瓦版に紹介された事もあり、今日はいつも増して混んでいる。

ダンジョンに潜る際に、やはり空腹では話にならない。しっかりと食べ、身体に力をつけて潜るのだ。事前んにしっかりと用意をするのも良い冒険者の務めである。

余談だが、生水ばかりで宿屋にも泊まらずに何日もダンジョンに籠る冒険者もいるが、やはり体調を崩して本来の力が出なかつたり、ふらついた所を突かれ普段よりも大きな怪我をしてしまつたりしてしまう。身体が資本である為、管理は大事である。

腹も膨れた二人は街中でも少し高台になっている酒場を出て、噴水広場へ下りていく。

「確かに…なんかカボチャ祭って感じね…」

噴水の前にカボチャを被つた小さな姿が見える。これが件の妖精の様だ。何故か冒険者が妖精からカボチャの様な物を受け取っているのが見える。二人して近付くとカボチャ妖精はこちらに気付いて声をかけてきた。

「やあ！お姉ちゃん達！イカス帽子が欲しくないかい！」

「わ〜い！」

「ああ…はい頂きます…」

嬉しそうにカボチャで出来た帽子を受け取るリリアと、何か言いたげなミュー。

どういった構造になっているのか、カボチャの下半分を切り抜いた形の帽子は兜の上から被つても落ちる事はなく、また重さをまるで感じなかった。髪の毛の間から突き出している角を阻害する事もなく中々快適である。

「イカスだろう！僕が被っているのに近いデザインなんだぜ！横のおばあちゃんから飴をもらってね！お姉ちゃん達！」

やたらと元気の良いカボチャ妖精のすぐ横に、椅子に座りとんがり帽子を被った老婆がこちらを見ると、籠った様な笑い声をあげながら飴を差し出してきた。

「わ〜い」

「ああ…どうもです…」

「種を持ってきたらもつと良いものをあげるからね…」

そういつて独特の笑い声をあげる老婆。

何やら一抹の不安が抜けないミューは気分が上がってこない。

「ミューさんさつきからテンション低いですよ！」

「リリアが高過ぎるのよ…。無料で人から物を貰うのって…何か慣れなくて」

「お祭りだからいいんですよ！」

「うん…そっか、そうだね」

早速ウキウキしながら貰った飴を舐めるリリア。

「わあっ甘〜い！ミューさんこれ美味しいですよ！」

「ついさつき四人分の料理を二人で食べたのによく食べれるわね！。私は取っておくわ」

「甘い物は別腹ですよ！うーん昇天しそうな甘さ…」

「全くもっ…ってリリア？」

飴を舐めていたリリアがそのまま前のめりで地面に倒れ込む。

「へっ？リリア…？リリアっ！！」

リリアは息をしていなかった。

暫くして復活して寺院から戻ってきたリリア。

「いやあ〜酷い目に合いました」

「ビックリしたわよー！全く…」

「あ！でも寺院の前で面白い話を聞きましたよー」

魂となつて彷徨っていた時に、寺院の前にいた人（魂？）に何やら話を聞いてきたらしい。それによると、種は一部の魔物…基本的に各ダンジョンの奥に棲息する魔物や、魔物が隠し持った宝箱から入手が可能だという。

「というわけで今日は大蔵行きましょう！」

「えー大丈夫かな…かなり魔物が強いって言うけど…」

「だ・か・ら、私が偵察してきてるから大丈夫ですー」

酷い目にあつたばかりなのに、いつになく元気なりリアに引きずられる様にして、ミュー達は大蔵へ向かったのだった。

大蔵室

元々はとある商人の宝物庫になる予定だったのが、工事計画が中止している間に盗賊やはぐれ冒険者等のねぐらになってしまったという哀しい場所である。

「要するに泥棒ばかりなんでしょー。嫌ね」

「まあ近寄らなければ大丈夫じゃないですか？あ！泥棒といえば、最近『ぱんつ泥棒』が出るらしいですよ」

「ええっ…何よそれ！！」

露骨に嫌そうな顔をするミユー。

リリアが話してくれた所によると、女性の冒険者に襲い掛かり、下穿きを脱がせ奪い去り、後日洗濯した上に強化までして送り返してくる…という謎の行動を行う泥棒だという。

「つまり…変態紳士なわけね…」

「洗濯して強化までしてくれるならいいかもです」

「いやいやリリア、あんたさあ…、下何も穿かないで帰るの？」

「あ……。恐ろしい犯行ですね…」

恐怖の面持ちで唾を飲み込む二人。

「とにかく…注意して進みましょう」

「ですすす」

遺跡のダンジョンと違い、下水と同様に非常に見通しが悪い。通路も狭い場所が多く、明かりも人骨から火が上がっていたりと侵入者を脅かす仕掛けが多い。

通路から部屋に入る時にも床から炎が吹き上がる箇所もあり、歩くだけで集中力を使う場所をリリアの先導で探索を進めて行く。

途中冒険者の為の募金を奨められたり、何故か酒をせびられたりしながら奥へと歩を進めていった。癒しの魔法の結果を買い忘れたリリアが一度街へ戻った以外は比較的順調であった。

「やっぱり遺跡とは比べものにならないわね…」
「かなり魔物が強くなってますよね」

下水や遺跡と比べても場所柄が非常に強い甲虫に、こちらを麻痺させる程の一撃を放つてくる大柄な戦士、徒党を組んで攻撃してくる野盗までおり非常に辛い探索となっていた。

「なんか…ごめんね」

「ミューさんいきなりどうしたんですか？」

常に勝ち気な彼女らしくなく、しおらしいミューの言葉に、癒しの魔法の結界を用意しながらリリアが問い返す。

「私…傷を負ってばかりでリリアにずっと回復の魔法使わせて疲れさせてるし…今日ずっと先導してもらってるし…なんか…私仕事してないなあって…」

肩を落として下を向いてしまったミューに、リリアは優しい顔で声をかける。

「ミューさんはちゃんと仕事してますよ。私がおとりになって連れてきた魔物もしっかり倒してくれるし、いざという時には私の前に出て守ってくれるじゃないですか。回復するのが聖職者の務めです。気にしないで下さい」

そういつて笑いかけるリリアの顔はまさに聖母のようで、ミューの沈んで冷えていた心は温かく溶かされる。

「うん…ありがとう。私頑張る。次の広間しっかりやるね」

「私もあんまり来た事のない奥まで来たし、もう少ししたら帰りましょ？」

「うん！そうだね」

しかし、この後少しがいけなかった…。

「ミューさん魔法使いを先に！」

「わかつてる…！」

大広間で魔法使いと、盗賊の中でも戦闘に特化したファイタータイプの集団に囲まれてしまったのだ。

ファイターを攻撃しようとする、脇から火の魔法が飛んでくる。魔法使いを追おうとすると、ファイターが斧を振りかざし道を塞ぐ。見事な連携で次第に回復も間に合わなくなる二人。

「仕方ない…。リリア！完全に守りを捨てるわ！少しの間堪えて！」

そう言い放ち、大地に足をしっかりと踏み締めると槍を激しく振り回し、辺り一面に砂埃を撒き散らしつつ数体のファイターを巻き込む。さらに、怯んだファイターの横を走り抜け魔法使いに肉薄すると一気に槍で貫く。堪らず地面に倒れ伏す魔法使い。しかし先程からの攻撃の影響で耐久が限界を超えたのか槍にひびが入る。

「リリア！大丈夫！？」

言いながら槍を背中に背負い、予備で持ってきていた盾と短剣をポーチから出すと、ファイター達に走り込みながら足を狙って攻撃する。足を抑え動きが鈍るファイター数名。

リリアとファイター達の間に入り込むと盾で斧の攻撃を防ぎながら、確実に一人ずつ打ち倒して行く。

ようやく周りに動くものがいなくなった後も、暫し肩で息をするミユー。

「リリア大丈夫だった？」

振り返ったミユーが見たのは、青い顔をして息も絶え絶えになって地面に倒れているリリアの姿だった。

「リリアっ！どうしたの?!回復間に合わなかったの?!」

辛そうな顔で弱々しく首を振るリリア。横を見ると開いている宝箱がある。どうやら戦闘中の喧騒で開いてしまったらしく、毒々しいガスが上がっている。

「毒の罠…。急いで毒消しを！」

しかし、ポーチの中には回復薬と、街でもらった飴位しか入っていない。いつの間にかアイテムも底をつきかけていた様だ。乱戦状態では確認する暇もなく、隙を見ながら回復薬を使い続けていた為だろうか。

「ああ…どうしよう…」

「ミユーさん…ごめんね…足引つ張っちゃった…」

「そんな事ないっ!そんな事ないよお…私がおつと頑張れてたら…」

「ミユーさんは充分頑張ってますよ…。私を置いて街へ帰って下さい…。また魔物の集団が来たら二人共…」

「そんな事出来るわけないでしょ…!」

「最期に…飴…舐めたいな…」
「……………分かったわ……………」

リアのポーチを探ると何故か飴が沢山出て来た。どうやら一度街に帰った際にまた貰った様だ。適当に一本選ぶと、リアの口に入る。

「ああ…美味しい……………」
「リア……………」

涙を流すミューの前で何故かみるみる顔色が良くなるリア。

「あれーなんか元気になってきたー」
「嘘ー！ー！ー！」

思わず絶叫するミュー。へへへと頭をかきながら立ち上がるリアのポーチから、ポロポロと飴が落ちる。状況がよく飲み込めないままミューが落ちた飴を拾い集める。よく見ると飴の棒の部分に紙が細く巻いてあるのが分かった。開いて見てみると…

【身体の状態を治してくれる飴です】

「ばあああああああああ」

ミューが再び絶叫した。

帰り道…。また少しプリプリと怒るミューをリアが宥める。

「あんな小さい紙じゃ分かんないですよー」

「そうだけど、冒険者足るものもつと注意力を持ってさーってもういいよ。とにかくリリアが無事だったし」

「ミューさん…」

「ほら、いいからこの扉開くの大変なんだから手伝ってよ」

「はい」

縦横に大人の身長の一・二倍程もあるつかという巨大な扉を力を籠めて開け…開かない。

「ちよつとリリア…それ私と逆に閉める方に力入れてるでしょ…」

「え…嘘？ミューさんが逆なんじゃないですか？」

何度か試すも一向に扉は開かない…。そうこうしている内に反対側から別の冒険者が開け始めた様で扉が動き始めた。二人共手を離す。

「わーい自動だー」

「……………」

人が通れる幅に開いた途端に、扉の反対側にいたエルフの女盗賊が素早く通ろうとする。しかし、リリアも同時に通ろうとした為、二人して開いた扉の隙間でぶつかる。

「あーすいません」

「こちらこそ…」

再び同時に動く二人。

「あーすいません…」

「いや……」

さらに……。

数回同じ事を繰り返した所でミューがリリアの首根っこを掴み扉からどかすと、女盗賊に謝る。

「本当に……すみません……」

「ああ……こちらこそすまない……」

女盗賊も気恥ずかしかつたのか、振り返りもせず迷宮の奥へ走っていった。

「リ〜リ〜ア〜」

「え！私が悪いんですかー！」

もういいやと無言で進むミューを後から追いつけるリリア。

何か成長してるんだかしてないんだか分からないリリアに、やきもきした心はとつくになくなりミューは可笑しくなって走り始めた。

「ちょっと！ミューさん早いー置いてかないでー。何で笑ってるんですかー」

街に帰り、見付けたアイテムを鑑定してもらい、さらに不要な物は引き取ってもらう。

「なんだかガラクタばかりね……」

「まあ盗品とかだから仕方ないんじゃないですかー。あ、ミューさんまた大量に地図売ってる」

「いいでしょ鑑定費用取られないんだから、いい小銭稼ぎになるのよ！」

嬢ちゃん解ってるねと、酒臭い息で買い取り作業を進める店主。酒を飲みながら店をやっているのに鑑定眼が落ちないのが不思議である。

「後は…武器を修理に出してっ…リリアはどうする？」

「私は露店見えますー」

「じゃあ後で噴水広場に集合ね」

「あいあいー」

今回の探索で完全にひびが入った槍の修理は普段に比べたら高額だったものの、今日の探索で稼いだお金からすれば充分お釣りの出る金額だった為、ほっと胸を撫で下ろすミュー。

「お嬢さんはいつも小まめに修理に持ってくるのに、珍しく無理したね。強い魔物に襲われたのかい？」

「それもありますけど…。友人が急に成長した気がして焦ってしまっただけ」

つい本音が出てしまう。優しそうなドワーフの鍛冶職人の真っ直ぐな目に思わず口から出てしまった様だ。

「でも無事に帰ってこれたんじゃないか。何があってもまず帰ってくる。反省したら気持ちを切り替えて探索に出る。引き摺っちゃいけないよ。曇ったりした心は迷いになるんだからね」

「はい…ありがとうございます」

「何だか説教臭かったね…、すまんすまん。っと出来たよ」

まるで新品の様になって帰ってきた愛槍を受け取りながら、ミューは思う。

そう、何であれ帰ってくる。今回はもう少し…もう少しという疾る気持ちが無理をさせてしまった。そこにきつとりリアに追いかけて行かれない場所でもしれないという気持ちもあつたはず。慢心・焦り。慣れない場所でそれは命取りになる。今回は助かったが次はないかもしれない。武器は傷つけるだけでなく守る為にも使えるのだから。一人で駄目なら二人で。本当はもっといた方がいいかもしれないけれど、まず二人守れる様になるう。そう槍に誓うのであった。

少し気を引き締めて噴水広場に向かったミューが見たのは、とんがり帽子を被り、嬉しそうに光る南瓜の棒を持って花火に火をつけようとしているリリアだった。

「ちよつと！リリア何それ!？」

「え？種と交換して貰った箱から出てきました！。ミューさんの分これね」

そういつてとんがり帽子と、光るカボチャ棒、さらにカボチャ型の花火と手持ち花火まで渡される。横にいる老婆と同じデザインの帽子の様だ。そしてカボチャ型の箱らしきものが辺りに落ちていく。無言で箱を片付けた後に、ミューも帽子を被る。これは流石に兜を

脱がないといけないタイプの様だ。

「似合いますよー」

「そうかな…?」

少し照れながら立つミューを引つ張ると、リリアは大声で叫んだ。

「今から花火大会やりますよー！余ってる花火を持つてる人は噴水まで集まれ〜!!」

「え!?花火大会?」

「だってお祭ですよ。はい会場はこっちですよー」

「ま…いっかお祭だもんね。会場はこっちですよー!!みんなで咲かそう南瓜の華〜!!」

「ノリノリですねミューさん」

そうこうする内に集まる冒険者。

「おお会場はここか」

「差し入れをあげよう」

余ったカボチャ花火をくれる人もいる。数名集まった所で早速花火に火をつける。街中で火を使うのもどうかと思いつつも、水がそばにあるから困ったら漬けてしまえばいいやという判断である。

「おお〜」

「ファイヤー!」

カボチャの形をした土台から色とりどりの火花が上がり、蝙蝠の形の影まで現れる。非常に凝った作りで周りの冒険者達の目も楽しませる。さらに手持ちの花火を付けると噴水の中をリリアが飛び跳ね

始めた。

「火を点ける」

「花火大会だあ」

ミユーも一緒になつて噴水の中でグルグルと飛び跳ねながら手持ちの花火の火を点ける。パチパチと燃える花火はこちらも非常に彩りが綺麗である。

参加者達も次々に花火に火を点け、噴水の真ん中の土台や、さらには水の中にまで設置する。魔法もかかっているのか水の中でも綺麗に火が上がる。

「わーいわーい花火」

「寺院に火を点ける」

「ふぁいやー！ー！！！」

物騒な事を言っている者もいるようだが実際にやりはしないだろうと高をくくっていたら…。

ドカーーン！！！！

「誰だ 魔法まで使ったのは」

「熱いぞ！！脱げ」

「そつだ脱げ！！！！」

火炎の魔法が噴水の中で飛び跳ねていた者達にかかりそうになり慌てて服を脱ぐ参加者達。

「裸祭だ」

「いえ！！！！い！！！」

流石にこれは衛兵が駆けて来るだろうと内心冷や冷やしていたミューだったが、衛兵は寺院の方向へ走り込んで行った。犯罪者だゝ捕まえるーと声が聞こえる。どうやらそちらに忙しく、こっちの騒ぎは放置の様だ。ほっと胸を撫で下ろすミューの横で、ポーグルの小さな魔法使いが再び火炎の魔法を盛大に放つ。

「ふぁいやーー燃え上がれ〜〜」
「うわぁぁぁぁ」

何故か服を脱いだ男性の戦士が急に毒になったと思うと噴水に突っ伏す。噴水の水の中に寝転ぶ者まで現れた。

「人工呼吸しろー」
「危ないぞー」

無茶である…。

ようやく花火も全て消費し、寺院の方では犯罪者がひっ捕えられ衛兵に連れて行かれた。参加者も方々に帰って行く。

「いやぁ遊びました〜」
「だねー」

さてそろそろ服を着ようと、荷物を漁る二人。驚愕の表情で固まるリリア。

「ない……」

「え？何が？」

「私のぱんつがない」

「え？え？」

「私のぱんつがないいいいい！！！！」

「え！？ちよつとリリア？」

慌てて荷物をひっくり返すリリア。

「嘘！祝福されたレギンスだったのに！！」

「え！嘘！本当じゃないの！？」

ざわつく噴水広場。囁きの様に、ぱんつ泥棒か？ついにこの地域にまで現れたか…、さつき犯罪者が連れて行かれたがまさか…等の声が聞こえてくる。

「誰か…ぱんつ知りませんか？」

「ノームの娘のぱんつを誰か見てませんか？」

ぱんつを連呼するうら若き乙女が二人。聞いている周りのざわつきも大きくなる。

「いい加減恥ずかしいし、ちよつとリリアもう一回荷物見てみなよ」

「はい……。あ…ぱんつあった！奥に入ってた」

「もう…あんなたって娘は！！すいませんお騒がせしました」

「…！！！！本当にすいません！！！！」

頭を下げ続けるミュー。笑って返す周囲の人々。

何だかんだいって今日もこの街は平和である。

こんな事をしていても笑って許すそんな雰囲気もある。結局みんなこの街が、この場所が好きなのだろう。

これからもこの二人も含めて冒険者は沢山現れて去っていくだろう。でも、きっとこの過ごした時間は忘れずに心の中に残るだろう。人と人が触れ合った記憶は早々風化するものではないのだ。

この街に関わる全ての人に幸多からん事を。

カボチャ精霊と花火大会（後書き）

この花火大会は最後大混乱でした。

ちなみに作中で裸と書いていますが、実際は肌着の様な物を着ているので真っ裸ではありません。そこまでエロスはありません。

まるで終わりの様な書き方をしましたが、当分書きます。書かせて下さい。ネタはリアルリアさんが大量に出してくれます。ここでも感謝の言葉を述べたいと思います。ありがとうリアルさん！読んで吹き出すとイイヨ！

このゲームも関わった人もなんかみなさん大好きです。ありがとうございます。ありがとうございます。

仲間と共に・・・(前編)(前書き)

大分日が空いてしまいました。前回敗退した大蔵室リベンジ戦です。

仲間と共に・・・（前編）

「色んな武器を扱えた方がいいよね、やっぱり」

噴水前の広場でミューは腰のバッグから武器やアイテムを整理しながらそう呟いた。

腰に着けているポーチは、幾つか身体の動きを制限しない程度の追加が可能であり、魔物が隠し持っていた物から入手した物や、露店で不用品として売っていた物を買った物、冒険者ギルドからの依頼の報酬等で少しずつ揃えていったのであった。

斧、短剣と盾、両手剣、そして愛用の槍。これら全てを荷物にまとめると大蔵室へとミューは向かったのだった。

「今日のはのんびりかな。リリアとの待ち合わせまで大分時間あるし」
そう言つて入口付近の甲虫を狩り始める。ギルドからの依頼で、ある程度の数を退治してくれば賞金が出る。また、僅かながら自分の鍛錬ともなる。一石二鳥なのだ。

「まずは…短剣かな」

前回の戦闘でも守りながらの戦いに非常に有効であった、短剣と盾を装備する。ちなみに他の武器は両手持ちとなつてしまふ為、必然的に盾を装備したければ片手で扱う事の出来る短剣が得物となる。

暫く戦う内に、入口付近の甲虫は比較的退治してしまい少しずつ奥へと進んで行く。通路の突き当たりに差し掛かる頃、横合いから一

人の追剥がミューへ投げナイフを放ってきた。

「あなた達のテリトリーを犯す気はなかったんだけどね、やられたらやり返すわよ！」

そう言つて、盾で飛んで来たナイフを払いつつ距離を詰め、追剥に連続攻撃を繰り返す。距離を取られてナイフを飛ばしてくれば盾で防ぎ、近付いて足を狙い動きを抑える。あつという間に倒す事が出来た。

「どんなもんよ」

と、気付けば結局ここ大蔵室の二か所ある盗賊のアジトの内一つに足を踏み入れてしまっていた。

「誘いこまれたのかしらね…。私は悪くないわよつと」

アジトの奥から現れる斧を持った姿に身構える。しかし、その近付いてきた姿の持ち主は風体が分かると鎧をキツチリと着込んだ冒険者の二人であった。

「いやあく驚かせちゃまったみたいで悪かったわ」

「すまん」

自分よりも大柄な人間の男性の戦士2人に謝られて恐縮するミュー。

「いえ…私もついつい入り込んでしまいましたし」

「あんまり畏まらないでくれよ。俺達も熟練つてわけでもないんだ

から」

「悪いな」

聞けばこの二人も先程パーティを組んだばかりとの事。折角なので二人に混ぜて貰う事にした。

「同じユニオンか何かですか？」

「いや。本当にさっき知り合ったのさ」

「そうだよ」

気さくな方がカイ、何故かほとんど相槌しか打たない方がモルガンと名乗った。三人もいるのだからとアジトの奥を探索を進める。

やはりミュー一人の時よりも易々と敵を屠っていく。複数の追剥や戦士タイプの賊が出て、二人が斧で攻撃を加え怯んだところを一体ずつトドメを刺していく。

「やっぱり三人いると早いですね」

「そうだなあ。でも戦士三人だとバランス悪いなあ」

「そうだね」

「ここの大蔵室まだ奥まで探索してないですよー。盗賊とかいたら楽だと思っんですけどね」

合間を見て癒しの結界を展開させ傷を回復しつつ、談笑する三人。やはり僧侶がいて回復をしてくれない分、自分達で様子を見て傷を癒さなければならぬ。戦士三人だと攻撃に特化している分戦闘は短くて済むが、やはり魔法使いや盗賊の職についている者等がフォローしてくれると非常にありがたいのである。

また幾人かの賊を倒し、ミューが先程の賊が落とした短剣を拾おうと腰を屈めた時だった。

突然火の玉が飛んで来たかと思うと、モルガンに直撃した。もんどりうって転げるモルガン。

急いで武器を構え、火の玉が飛んで来た方向を見ると、小柄なポークルが杖をこちらに向けていた。その赤い殺気立った目と共に…。

「チツ！『人狩り』か…」

「油断してしてたわ」

賊を追い払うのに慣れ、三人の戦闘の流れも出来てきて油断していた所だったから堪らない。モルガンは先の戦闘で消耗していたらしく、火の魔法を食らい既に動かない。そしてミューとカイの二人も傷を負った状態で、そろそろ癒しの結界を展開しようかとしていた矢先だった為余力は少ない。

逃げるかどうかしようか悩んでいるミューの横で、カイが斧を振りかぶってポークルの魔法使いに切り掛かる。

しかし、人狩りをする程の覚悟のある冒険者の炎は、斧の一撃が届く前にカイをもその餌食にしてしまったのだった。

目の前で立て続けに散らされる命を見て、ミューは迷わず逃げる事を選んだ。アジトの入口側に人狩りがいる為、やむなくアジトの奥にである。どうやら逃げる者には興味はないのか、得物が二つも手に入った為か、人狩りは追ってくる事はなかった。

先程の場所から離れ、少し狭まり部屋と部屋を繋ぐ回廊の様になった場所で一息つくともミューは手持ち最後の回復薬を飲み終えた。覚悟を決めて慎重に入口へ戻り始めた。のんびりしていれば他の賊にやられる可能性もある。現状のミューの装備と強さでは、賊が複数襲いかかってきた時に一人で対応出来る程強くないのだ。

左右を見渡しながらゆっくりと歩みを進める。どうやら既に人狩りは立ち去ったようだ……と、ほっと胸を撫で下ろし、もう一歩足を

進めた時に、呪文の詠唱の音が背後から聞こえ身体が自由がきかなくなつた。後ろからヒタヒタと近寄る小柄な足音、そして新たな呪文の詠唱。ミューは心の中で絶叫した。

運命を司る気まぐれな神の天秤は、今回も無事にミューの側に傾いてくれた様だ。無事に大蔵室のダンジョンの入口付近にある守護者の像の横で、ミューは蘇ることが出来た。横には既にカイの姿もある。

この世界では、死は絶対的な終わりではない。不幸にも死を迎えてしまった者は、運命を神の天秤に委ね、運が良ければ再び生を得ることが出来、運が悪ければ存在ごと永久に失われ完全なる終わりを迎えてしまう。

「やられちゃったね」

「ああ」

「あれ？モルガンさんは？」

「何でも斧を奪われたらしく、復活してすぐに奥へ走り込んでつたよ」

そういつた矢先に、目の前で青い清浄な光と共に蘇るモルガン。そして直ぐ様アジトの方へ走り込んで行く。

「俺の斧おおおお！！！！！！絶対許さねえぞ！！あの糞ガキぶつ殺してやる！！！！」

「……………」

呆気を取られる二人に全く気付くことなく叫びが遠ざかっていく。

そして少しすると、また蘇ったモルガンが叫びながら再び奥へと走って行った。

「ああいう人だったんですか…」

「ああーそういえば悪魔の名を冠した斧を手に入れたとか自慢してたわ」

「それは結構奪われると悲しいですね」

「ミューさんは大丈夫だった？」

「ミューでいいですよ。私は…さっき入手した短剣だけです。これならまあいいかな」

「そか。とりあえずどうでしょうか？一旦街帰る？」

「そうですね。荷物整理もしたいし」

暫く待ったが、今度はまるで帰ってくる気配のないモルガンを置いて二人は街へ帰還した。

規定数に達していた甲虫退治の依頼を報告し、再度受け直す。こういった依頼は、常に増え続ける魔物がいる限り無くなることはない。何となくそのままパーティを組んだままだったカイと連れ立って再び大蔵室へ。

今度は人狩りの気配もない様で、中は静かなものだ。鍛錬の為と今度はミューも斧を装備して再びアジトの方向へ進むと、入口でドワーフの戦士が両手剣を使い、易々と敵を切り裂く様が見えた。折角なので声をかけ一緒に奥へと進む。

十字路になった箇所、刃渡りだけでミューの背丈ほどもある長大な斧を持った巨大な体躯の戦士と戦っているエルフの男性が目に入った。どうやら普段のミューと同じ槍使いの戦士の様だ。戦闘が終わった所で声をかけると笑顔で参加を了承してくれた。

癒しの結界を展開し、傷を癒しながら改めて挨拶をする。

「よろしくねー僕シンって言うんだー」

「4649」

見た目よりも随分と若いのか、厳つい髭と体格に似合わず笑ってる様な高い声と語尾で喋るドワーフのシン。もう一人は遠方の出身なのか、いまいち言葉が通じない感じのエルフの男性。不安を覚え確認を込めて再度声をかける。

「この辺りで狩りをするつもりですが大丈夫ですか？」

「YOROSIKU」

「うんいいよー」

何やら不安が増した気がするミューであった。

増した不安とは裏腹に4人のパーティしかも全員戦士というのは非常に攻撃的な組み合わせの為、ほとんど傷を負うこともなく敵を倒していく。

それでも戦闘が続いて蓄積したものや、巨大な戦士の使う叩きつけで身体が動かせない内に防御出来ず食らった手痛い一撃で傷は少しずつ増えていく。癒しの結界を張りつつ、ミューがぼつりと呟く。

「あ」

「どしたん？」

「どーしたのー」

「女の子私だけだ。逆ハーレム」

場が和む。こんな冗談でも笑ってくれる様なパーティだと、戦う時に緊張しなくていい。先遣隊としてこの街に早めに来たものの、気ままに探索をしているミューは、熟練冒険者と違い、それほど多くのダンジョンの通行許可はまだ出ていない。同じ先遣隊の冒険者の中には、現在発見されたダンジョンは全て制覇している者もいるらしい。また制覇した者でも毎日ダンジョンに潜り希少品の発掘や自己の研鑽を欠かさないという。非常に素晴らしい事だが、人には人のペースがある。暗く閉ざされたダンジョンの中で、こういった笑いが出せるのんびりとした探索の方が自分には性に合っている。そう笑いながらミューは心の中で思った。

そうこうする内に、また戦いの流れが出来上がっていく。戦士や賊の姿が目に入ると、誰かがオトリとなって呼び寄せ、別の者が防御の為に身体をしっかりと地面に沈めて待ち構える。また別の者は戦いの雄たけびを上げて周りを鼓舞するのだ。回復役がない事を除けばこの戦士四人のパーティでは中々理想の流れと言えよう。

回復薬が足りなくなったメンバーに回復薬を交換したり、合間に談笑したりしつつ戦闘と回復を繰り返していると、地面に倒れ伏した巨大な戦士の影から宝箱が見えた。盗賊の技能を持っている者がいない為、誰が開けても大差はないのだが、ミューが宝箱を開けに行った。

「ミュー行っきまゝす。みんな離れてね〜」

遠巻きにミューを見ている他の面々。しかし、思ったよりも開けるのに時間がかかってしまう。その間に常よりも巡回ルートを早めたのか、巨大な斧を掲げ戦士が到達してしまった。

「えー何だろ。開かないなあ」

「ミューちゃんは開けるのに専念してて！」

「こっちは僕達に任せて〜」

「YORRO〜」

言葉に甘えて解錠に集中するミュー。しかし、敵はこちらの都合など勿論関係ない。斧でパーティをどんどん押し込んでくる。気付けば宝箱を開けるために作業しているミューのすぐ横で戦闘をしている状態となってしまうっていた。

「畏は…石つぶてかな？お！開いた〜」

激しい轟音と共に宝箱が爆発し、はじけ飛ぶ。敵味方問わず巻き込まれる戦士達。

土煙りが収まると、動く人影は3つ。瀕死ながら辛うじて生きているミュー。ある程度体力が残っていたシン。そして、長大な斧を地面に突き立てて頭を振りながら立ち上がる敵であった。

慌てて足を狙って斧で攻撃を繰り返すミュー。シンも両手剣を力強く振り下ろす。今二人の頭にあるのは殺らなければ自分が殺されるという一点だけである。

どうにかトドメの一撃を与え、ズズンと音を立てて地面にその長大な斧を落とす戦士。ほっと息を吐くミューとシン。

「あ・は・は・は…。ゴメンネみんな」

「たまにはあるよー。死体担いで行こうかね」

と、見ているうちに死体が一つ灰になる。神の天秤が悪い方に傾いてしまった様だ。ちなみに灰になってもまだ蘇る可能性はあるが、これに失敗した場合魂が消失し、永遠に消えてしまう事となる。

「嘘ー！」

「わわわわ」

慌てて灰と遺体を回収しようとするも、先程の轟音でアジトから大量の賊が現れ、仕方なくそのままして逃げ出す二人。ダンジョンの入口で泉の水を含み、喉の渇きと疲れを癒す。

「よし！戻ろう！」

「おう」

再びアジトの奥へ進む二人。先程の場所にどうにか辿り着くと遺体は無くなり、灰だけが残っていた。自力で復活が出来た様だ。賊がそこら中に溢れている為、シンが盾となっている間に灰を回収する。

「回収出来た！」

「はい逃げよう」

二人して武器をしまつて全力疾走で逃げる。ナイフが飛んでこようと斬りつけられようと全て無視して入口の像へと向かう。像に近付くと灰が荷物から勝手に放れ像が光り出した。どうやら無事に復活出来た様だ。

「A R I」

若干復活させない方がよかったのではないかと心の中で悪い考えが一瞬よぎってしまったミユウであった。

その後街へと帰還しパーティは解散した。夕飯とその後の探索をリアと約束していたからだ。

「今日は本当に組んで下さりありがとうございました。後ごめんなさい」

「OTUKARE」

「大丈夫だよー。またねー」

結局エルフの戦士とは最後まで会話が通じたのか通じてないのかが分からないままであった。微妙な顔をして見送るミューに一人まで残ったカイが声をかける。

「そっぴやさつき話してたけど、知り合いの盗賊来てもらおうか？」

「いいんですか？」

「ああ。俺は大蔵室はあらかた探索終わってるし。後から行くように連絡しとくわ。ダンジョンの入口で待ってて」

「わかりました。ありがとうございます！」

「うんお互い様さ、またね」

出会いもあり、別れもある。一緒にパーティ組んだ相手の縁からこうやって繋がる事もある。本当に様々な冒険者がそれぞれの思惑でもって動いている。同じ場所で探索をしても人が違えば様々な物語が生まれる。

そういう事もあって自分は冒険を辞められないのかもしれないとミューは思いつつ、リリアの待つ酒場へと向かうのであった。

仲間と共に・・・(前編)(後書き)

今回も色々ネタがありました。が幾つか選んで書いています。
ドワーフの戦士はチャットの際ほとんど「www」が語尾に付いて
いました。

エルフの戦士は最初から最後まで本文の通りな感じでした。
実際色々な人がいますね。

仲間と共に・・・（後篇）（前書き）

こちらは何故かギャグパートと化しました。

我がパーティは今日も平和です。そして人の縁というのは本当に大事だなと感じます。

今回書く際にどうしてもごく一部でネタバレに近い物が出て来てしまいました。細かい描写をそこだけぼかしていますが、ご注意ください。大蔵室までクリアしていれば、ああ〜というネタです。

仲間と共に・・・（後篇）

「という感じで色々あったのよ！」

待ち合わせにしていた酒場で頼んだ料理をモグモグと口に入れながら喋るミュー。口元は隠してはある。ちなみに今夜も4人前である。

「そんなんですかー。でも助かりますね。盗賊さんが来てくれると

上品に少しずつ口に運ぶリリア。

「というわけで食べたなら最深部まで行くわよ！」

「はい」

大蔵室に入ると、先程カイが派遣してくれていると言っていた盗賊の冒険者はまだ来ていない様だった。ミューはごそごと両手剣を出す。

「そうそれでね、さっき一緒だったドワーフの人の剣捌きがカッコ良くてさあー。思わず装備してみたよん」

「おお！カッコいいですね。でもへっぴり腰」

「仕方がないでしょ！バランス取るの大変なんだから」

そう言いながら剣を振ってみるミュー。中々凶悪な風切り音に怯えるリリア。

「私に当てないで下さいよ」

「分かってる、分かっているって。…あれ？」

ひたすら剣を振り続けるミュー。

「ちょっとミューさん何やってるんですか!？」

「いや…私も分かんない。なんか…身体が勝手に…」

人に当たらないように壁に向かうも、何故か剣を振り続けてしまうミュー。

「たまに呪いがかかった武器があると聞いた事がありますが、こんな悲惨な呪い…」

「ちよつと見てないで止めて〜!」

「気力が無くなるように技をいっぱい使えばいいかもれません」

「そうなの〜!？」

早速壁に向かつて、薙ぎ払い等をするミュー。非常に危険である。しばらく色々な技を試すと突然剣をしまう事が出来た。

「……………呪いね……………」

「……………呪いですね……………」

「私…両手剣は使わないようにするわ……………」

「それがいい気がします……………」

結局短剣スタイルに戻したミューであった。

「何か疲れた……………」

ダンジョンの中だというのに横になるミュー。リリアも一緒になつて横になる。

「リリア?」

「添い寝」

ちよつとほっこりしたミューだった。

「お二人さん和んできるとこ悪いんだけど行くよん」

気付けばポークルの盗賊が目の前に立っていた。寝ているミューの目線からしても、あまり高さを感じない小柄な身体だ。

「カイから派遣されて来ましたデイジーです。よろろー」

「あ、はいよろしく願いしますミューです」

「リリアです」

「奥まで探索するんだってね？サクサク行くよー」

「はい」

「お願いします」

早速進む一行。前回敗退した大広間に差し掛かる。ゴクリと生唾を飲み込む二人の緊張等全く関係なく、明るい声で素早く進むデイジー。

「行くよー」

「あぁっ！ちよつと待って下さいよ」

「待たないよー」

「元気ですね」

オトリとなる煙を設置し、そこに魔法使いや戦士達が集まった隙に先へ進むか、気が向くと短剣で近付いてきた敵を高速で切り刻んでいる。それ程力があるように見えないのに、あっという間に敵は「なます切り」である。

入口に炎の罨が仕掛けてある部屋に入ろうとした所で、戦士の数名が追い掛けて来る。

「無視しちゃっていいよー」

そうしたかったが、しつこく攻撃されて振り払えずミューは牽制の為に数回切りかかると、一気に部屋の中へ。一人ついてきてしまった盗賊の戦士を仕方ないと呟きながら、あっという間に切り刻むデイジー。かなりの腕である。

「リリアー早く〜〜〜」

「はーいーい」

入口の炎に焼かれながら入って来るのは最早お約束である。

魔法局駐屯地

冒険者ギルドに来ていた依頼によると、この大蔵室の調査を進めようとした所、恐ろしい怪物に襲われ調査団が壊滅しかかったらしい。そして冒険者にその露払いをして欲しいとの事であった。調査を進める為に作ったであろう駐屯地も今では野戦病院の体である。

「冒険者か！今更のこのこと…これだから下賤な者に頼むのは嫌なのだ！」

あまりの言い草に青筋が浮かぶミューとリリア。宿める様に話の続きを促すデイジー。

「…ともかくだ。ギルドに依頼した通り、怪物はこの先に封じてあ

る！さっさと退治するのだ！わかったな！」

完全なる上から目線の言い方にも、一切表情を変えないデイジーに、ミューとリリアの二人も抑える。

そして投げつける様に渡されたのはヒビが入った水晶であった。

駐屯地の奥へと進むと、件の怪物が封印されているだろう装置があった。早速先程の水晶を嵌めこんでみるも反応は無い。

「やっぱりヒビが問題かな」

「ですよね〜」

デイジーは後ろで腕を組んで静観している。用心棒はするが、口出しは基本的にしないスタンスの様だ。

仕方がないので、駐屯地に戻って聞き込みをしてみると、この大蔵室のどこかに研磨する装置があるかもしれないと情報を

得る事が出来た。ただ、元々ここは下水の一部だったせいもあり、

危険がないように装置は停止されているかもしれないとの事。

早速地図を見て、まだ到達していない場所へ進むことにした。

道を戻りながらミューはデイジーに声をかける。

「何でさっき怒らなかつたんですか？」

「怒って何になる？話が進まないだけじゃん」

「そうですね…あんなに言われて腹が立たないんですか？」

「腹立ててもムダー。貴族様は甘やかされて育ってるし、自分の思う通りにならないから身分の低い冒険者如きに気を配ってられないんですよー」

魔法局の調査団でもある騎士達は、貴族の次男坊等が多いらしく正

直な所、実戦に際してまともに戦える者も少なかったらしい。そして貴族と冒険者の身分の差ははっきりと別れている。まともに刃向っていたらどうなっていたかと、今更ながらに恐怖を覚えデイジーに恐縮するミューとリリアであった。

「こつちかなー」

少し道を戻り、無数の甲虫が溢れる道を通り抜け巨大な扉を通ると道の途中にハシゴが掛かっているのが見てとれた。これを登れば上部に上がることが出来る様だ。今まで歩いていた場所は本来下水として機能していた時は、頭上まで水が流れている場所だったらしい。デイジー、リリア、ミューの順でハシゴを登り、少し進むと道が切れている箇所に着いた。

「跳ぶよー」

「え？」

そう言つて助走をつけて反対側に跳んだデイジー。リリアも軽々と反対側に到着する。

ミューも真似して助走をつけようとし、鎧の重量がそもそも自分の持てる重さを超えているのに気付いたのは跳んで距離が足らず落下してからだつた。

「えーミューちゃん届かないの？」

「ミューさん大丈夫ですか？」

「大丈夫……」

武器をポーチにしまい重量を軽くする。これで跳べるはずだ。再び梯子を登って助走をつけてジャンプする。

ゴーン

「痛つああああああ」

兜が衝撃を和らげてくれたものの、目の前がチカチカする。跳ぶことばかりに気を取られ上方の確認を怠っていた様だ。石で出来た天井近くの梁にしこたま頭をぶつけてしまった。

さらにもう一回と、上をしつかり確認し空中に身を投げる。今度は気合いが足りなかった様でしつかりと助走をつける事が出来ず落下する。

「うわああああ」

さらにもう一度。今度は助走している最中に足を滑らせて下へ落下。

「うううううう」

上の台の上では、ポークルって可愛いですよねー、でしょー、デイジーさん抱っこしていいですか〜等と、ほのぼのした声が聞こえてくる。急いで合流しようと思ったミューが無事に対岸に辿り着いたのは10回以上失敗してからだった。

炎の罨に焼かれ、甲虫に追いかけられ気力も尽きかけたミューが見たのはスヤスヤと寝ている二人だった。

「酷過ぎる……」

「ほらー癒しの魔法をかけてあげるから気を持ち直しましょ？」

「うううう」

高台の先を進み、木で出来た階段を降りながらリリアがミューを慰める。ミューは色々とポロポロだった。先導しているデイジーは何故かやたらとジャンプしながら軽やかに進んで行く。

「それ…私が重いつてことですか…」

そつだと言わんばかりに振り向かずにその場で飛び跳ねるデイジー。真似して跳び始めるリリア。

「リリアまで…」

追いかけるミューの目には一筋の涙があった。

「ここだねー」

いかにもな大きい扉を三人で開ける。中には何やら装置が置いてあり、「用なき時はスイッチを切る事」とある。

何故か遠巻きに見ている二人を尻目にスイッチらしきものを入れるミュー。無事に装置は作動を開始する音を発したが、水で濡れていて痺れる様な衝撃があった。

「痛っ。二人とも知ってたの〜？」

振り返ると、ミューとデイジーの二人が部屋の外から頑張って扉を閉めている所だった。

「え！ちよつとー！ー！！」

必死に扉を開こうとする。戦士一人と、僧侶と小人の盗賊では力がちよつと同じ位なのか拮抗する。隙間からクスクス笑う声が漏れ聞こえる。

「ぬおおおお！！」

気合いを入れて一気に体重をかけて扉を開く。息を荒げ、ヨロヨロと出てきたミューへ、スイッチはONになったかと声を掛けるデイズー。

「スイッチはONになりましたが、ミューはOFFになりました」

そういつて膝小僧を抱いてうずくまるミュー。流石にやり過ぎたとミューの横にリリアは座ると手を引っ張る。

「ごめんなさいねミューさん行きましょ？」

「ううう…ダイエツトするもん…スイッチ一つでポンだもん…」

ブツブツ言いながら引き摺られていくミューであった。

その後無事に研磨する装置の所に到達し、再び駐屯地に戻ってきた一行。奥の結界の所に水晶を嵌めると無事に起動した。装置は赤い光を放ち、非常に凶悪な印象を醸している。

「用意はいい？いっくよー」

「よし！戦士本領発揮！！」

「いいですよー」

三人は光に包まれた。

光が止むと、そこは広間の様な空間だった。

リリアが防御の魔法を全員にかけ、ミューが気合い入れの為の声を上げる。

「ジャー」

デイジーは素早くオトリ用の罾を仕掛け、そこに集まった生ける屍を屠っていく。毒等を吐きかけられているが全て避けて短剣で切り刻む様は疾風である。

ミューも奥にいる自分の身長の二倍程もありそうな巨躯の戦士に狙いを定めると、斧の柄ををしっかりと握りしめ思い切り大上段に振り下ろしさらに横薙ぎに払う。力を込めた縦切り、足を狙うを横切りを交互に繰り返し足止めをしつつ確実に相手の体力を削って行く。そこに生ける屍を仕留めたデイジーが加わるとあつという間に戦闘は終了した。

「勝った〜」

「勝てましたね！三人だと早〜い」

「まあねラクシヨー」

駐屯地へと戻り、依頼の怪物を退治した旨を報告する。予想通り特に労う言葉もなく調査を開始するとぶっきらぼうな答えが帰って来ただけであった。とにかく依頼は完了であるから、ギルドに報告すれば報酬が手に入るはずだ。

「んじゃお先〜何かあったらまたよろろ〜」

「ありがとございました!!」
「手助け感謝です!」

駐屯地にあった光る転移装置を利用してあつと言つ間に帰還するデ
イジー。

「なんか本当に疾風の様な人だったね」

「盗賊つてスゴイですねー。でも楽しかったですよ」

「たまにはいいけどやっぱり自分達の力で戦いたかったな」

「少しずつ力をつけましょうよ。私達で…ね?」

「そうだね。さっ今日は一日疲れたし帰って寝ねいとね」

「ロイヤルスイーツの部屋ですか?」

「ふふふ。今日は高価なコインも拾ったしそれもいいけどね。いつ
もの部屋でいいわ」

そうして転移し街へと帰還する二人。転移の間際にカイにもしっか
りとお礼を言わなくてはと、心に刻んだミューであった。

仲間と共に・・・（後篇）（後書き）

相当ネタが貯まってしまい、書くのが追い付いていない状態です。実際には、黄龍の神殿までクリアしています。ここも色々あったので長編になるかもしれません。

期間限定イベントも始まったし、またそのネタも書けたらなあと思っっています。

ちなみに今回出てきたリリアさんですが、実際には別々に攻略してしまっただけでリアルリリアさんではなかったです。やたらとネタを振ってくれたので置き替えて書きました。デイジーさんはほぼそのまんまです。宝箱テロをやらかしたり、ジャンプに失敗して泣きながら追い付いたのも実際に作者がやりました。

両手剣振り回し続けたのはバグみたいなんです、折角なのでネタにしてしまいました。

南瓜話・余話 酒場の料理人かく語りき（前書き）

最近街中で南瓜帽子を被ってる人が少ないなあと思って夕飯を作っていたら思いついて一気に書いてしまったネタです。今回画像も挿入しています。これも深夜にみるとお腹に毒かもしれません。

南瓜話・余話 酒場の料理人かく語りき

厨房の主マイゾグは悩んでいた。

彼の目の前にあるのは荷馬車の半分はあろうかという、かなりの量の南瓜である。

つい先だつて行われた南瓜祭での集客を見込み、大量に仕入れておいたのだが、一番の客である冒険者達がダンジョンで種を探すのに夢中で思ったよりも酒場に足を運んでくれなかったのである。いくら少し寒くなつてきて保存がし易いこの季節であろうと、小出しにしているはこれだけの量は傷んでしまう。女性の胴周り程もある逞しい腕を組みながらマイゾグは溜息を漏らした。

この街の食事処も兼ねている酒場は、冒険者のパーティの斡旋から、冒険者ギルドの出張所、さらには盗賊ギルドの人間もいれば荷物の預かりまでであるという、非常に充実した施設となっている。ただ、冒険者ギルドの受付自体も今は噴水広場で王様からの直々の依頼を斡旋している特務職員なる者が行っている為、酒場までは中々来ない上に、盗賊ギルドに用事がある客もたまにしかおらずお店は空いている状態だ。

さてどうしようかと悩みながらカウンターで頬杖をついていたマイゾグの前に、救いの神いや…南瓜の神が降臨した。

「だーかーらー今日は奢るって。珍しいコインも手に入ったし」

「そうやって食事にお金使うからスイートルームが遠のくんですよー」

そう言いながら入ってきたノームの娘二人の内、一人が被っていた南瓜帽子を見てマイゾグは思わず彼女の手を握り叫んだのだった。

「南瓜の女神！！我を救い給え！」

いきなり大声を出され目をパチクリさせたノームの娘は、しかし話を聞く中でその目を輝かせて快諾してくれた。

「分かりました！そういう事なら手伝います！」

「さすが南瓜農家……」

「南瓜以外も作っていましたあ〜！」

随分と仲の良い二人だと目を細めたマイゾグは、この娘達に宣伝をお願いする事にした。何せ祭が終わっても頭に被る位南瓜が好きなんだろうから……。そう心の中で呟くと、二人を見送ったマイゾグは急ぎ仕込みに入ることにした。

ノームの娘二人は、南瓜帽子を被った方が色々と先導していた様だ。「汝 南瓜 忘れるなかれ」と書いた看板をどこからともなく用意して街を練り歩きつつ、声掛けをしてくれたりらしい。こっちですよーという声と共に大量の冒険者がドヤドヤと入ってきた。看板娘のマリーを始め、クールで知られているエリーゼもこの時ばかりは慌てて接客に走り回る。普段はカウンターで受けている注文も、お客に席に座ってもらいこちらから注文を取りに回るスタイルへと急遽変更した。

一体どんな技を使ったのか、二階のバルコニーにまで冒険者が溢れ、椅子がないものは樽にも座る始末である。

「ご注文ですね、ハイ！よろこんで！ダイヤモンド南瓜定食入りしました！！！」

「骨付き肉大盛りと、南瓜サラダ盛り合わせ注文承ったなのよね！」
「あの…南瓜ケーキがダブルで入りました…」

次々とやってくる注文に一人で手が回らず、何人かの冒険者が助けの手を挙げてくれ、マイゾーグは有難くその申し出を受ける事にした。

天井から吊るしてある肉を取ろうと頼まれ、脚立を出そうとしたポールの男の戦士を止め、エルフの男性の魔法使いが爽やかな笑顔で軽々と手を伸ばす。それに見とれて南瓜の皮を剥いていた手が止まり、どやされる若いノームの僧侶。ドワーフの男の戦士が奥から樽を転がしてきて酒を注ぎ、店員達と一緒に人間の盗賊の男女が給仕を手伝う。そこは新米も熟練もなく、ただ皆楽しそうに騒ぐ冒険者の群れだった。誰かが噴水広場から吟遊詩人を連れて来て歌わせ、やんやと喝采が上がり歌に合わせて踊る者もいる。普段は一人で飲みたがる常連の孤高の剣士も喧騒に混ざり、顔だけ見れば仏頂面であるものの、口元は笑みの形になっている。また、常連の男性にこそぞとばかりに自分の秘めたる想いを告げようとするグリエルが近付こうとするも、普段は酒場にまでは入って来ないエルフの妻に止められて厨房に引き摺られていった。

普段は酒を飲みながら悠々と調理するマイゾーグも必死に料理を作り続けながらも終始笑顔だった。自分はこの雰囲気味わいたいが為に料理人になったのかもしれないと、吟遊詩人の歌に合わせて鼻歌を歌いながら肉を焼き、ケーキを焼き、サラダの盛り付けに文句をつけた。

そんな大盛り上がりの酒場にこっそりとエルフの男性魔法使いの人狩りが入ってきた。気付いた数名が剣を抜こうと立ち上がるが、その人狩りの後ろに衛兵が立っているのを見て取ると剣を収めまた宴

へと戻っていった。衛兵に捕まった人狩り・犯罪者は牢獄に入れられ長い苦役の時間を過ごさねばならない。その前にせめてもの恩赦であろう。衛兵も兜を脱ぎ寛ぎながらも人狩りの姿からは目を離さず、そして槍からも手を決して放さなかった。杖も取り上げられ、入口近くにあつた椅子に腰掛けた人狩りに近くの者は少し距離を取るが拒絶はしなかった。恐る恐るマリーが注文を取りに行く。

「ご注文は…どうなさいますか？」

「……南瓜のサラダとケーキを頂きたい……」

「ああ…それと儂と、こやつ用に麦酒を頼むぞお嬢さんや。一杯位飲んでも盛り上がりに参加してもバチは当たらんじやる」

そう言つて老齡のノームの衛兵は自分の角を撫でながらカラカラと笑つた。

料理を持って行き暫くしてから気になつて覗いたマリーが見たのは、泣きながらごめんなさいと繰り返す、それでも手を止めずに食べているエルフの男性と、優し気にその背中を見守る衛兵だつた。

「この料理の味を忘れるんじゃないぞ。これを作つてくれた人の事を忘れるんじゃないぞ。野菜も肉も、そして無論の事、人様の荷物も奪つていいもんなんてありやせんのだ。何があつたかは知らんが、これを覚えて牢から戻ってきたらまた二人で酒を飲もう。儂は待つておるからな」

「……………すみません……………すみません……………」

ついに泣きじゃくつて手も止まつてしまったエルフの男性を衛兵は優しい眼差しを込めてずつと背中を撫でてやるのであつた。

怒涛の注文ラツシユも落ち着き、腹が膨れると今度は酒に走るもの

は常の流れである。樽が幾つも開けられ、ジョッキが空けられ、人々の頭上で何度となく乾杯が叫ばれる。冒険に成功したものの、高難度の武器の鍛錬に成功したものの、強力な魔物の討伐に成功したものの、希少な指輪を手に入れて喜んでいられるもの。逆に命からがら帰ってきた冒険者達は、その苦い失敗を忘れるかの様に、涙で流れた分を取り戻す様に杯を空けていく。悲喜こもごも…全てを含め、酒場の夜はいつ果てるともなく盛り上がり続けた…。

大分遅くなってきた頃、冒険者達は三々五々に帰っていく。いつの間にかエルフの男性と衛兵の姿もない。行くべき所へ行ったのだろうか。綺麗に空になった皿が椅子の上の乗っているだけであった。皆、口々にマイゾーグへ、美味かった、ありがとうと笑顔で声をかけ去っていく。普段は喧嘩が起こる事も少くない夜が今日は随分皆楽し気だったと、マイゾーグが宴の後を見回すと、宣伝を頼んだノームの娘達が南瓜帽子を外すことなく笑顔で皆に挨拶をしていた。どうやら宴の間もずっと気を配っていてくれていたらしい。インプすら拳の一撃で倒すマイゾーグであったが今日ばかりはその剛腕を振るうのは料理だけであって満足のいく夜であった。酒場の女性店員達も、疲れが見え始めながらも皆笑顔が輝いていて、今日の賄いと給金は特別豪華にしてやろうとマイゾーグに思わせるに足るものであった。

「いやあ、助かったよお嬢さん達。今度来た時は一声かけてくれ。特別メニューを無料で提供させて頂こう」

「聞いた？これの為に頑張った甲斐があったわー」

「南瓜農家の面目躍如ですね」

「だから南瓜以外も作ってるし、お父ちゃんは立派な衛兵なんだから！」

「だから槍をいつも使ってますか？」

「それもあるけど、やっぱり鍬に似て使い易いというか…」

「だったら斧使えばいいじゃないですか…むしろ鍬で戦ってください…」

「カツコ悪いじゃない!！」

まだまだ元気なノームの娘二人に少々気押されながらも、マイゾーグは問い掛ける。

「お父さんは衛兵をやってるんだ？」

「そうですね!大きな街で頑張つてほとんど帰って来ないけど、私と同じ角だから見れば分かるはずです。まさかこの街なのかな?詳しくは分かんないですけど」

「南瓜農家やるなあ…」

「だから南瓜だけの農家じゃないって!そもそも南瓜はね!日当たりが多少悪くても育つ優秀な野菜で…」

空いた食器を下げながら横を通り掛かったマリーはそういえば昨夜の衛兵の角も同じ形をしていたな…と思いつつも、大量の洗い物と化した食器達を厨房へと運ぶのに忙しく声を掛けることはなく動き続けた。

「イキユーザックさん、今朝方、荷馬車タクシーで届いたトマトも美味しかったですね。」

「ああ、そうじゃろ?うちの家で作ったのじゃ。うちの子達も元気しとるかのぉ」

「中々帰れない仕事ですからね、衛兵も。我々ガードナーもですけ

ど」

「うちの生意気な娘も、もう年頃のはずじゃ。儂と同じでいい角なんじゃよ」

「兜を被っていると分かりませんよ」

「そうじゃったの」

そう言つて朝方、冒険者が旅立つ為の門の前にいるガードナーと衛兵がカラカラ笑いながら話す。彼らの後ろには今会話に出ている水々しいトマトが門の脇に木箱に入れられ朝日を浴びながら、ちよこんと置かれているのであった。

後日振舞ってもらつた賄い。南瓜を素揚げして後入れするのがいいそうだと。

> i 3 5 4 6 8 — 4 4 6 3 <

さらに足りなくてカレーも食べる某角娘。

> i 3 5 4 6 9 — 4 4 6 3 <

南瓜話・余話 酒場の料理人かく語りき（後書き）

今回はまさかの酒場が主人公です。敢えて名前を出していないいつもの二人組はこっそりと過去も語っています。

槍と鍬って明らかに似ていません。

酒場の店員他は、結構取材したので、元ネタが分かると面白いかもしれない。備品もほぼ全て店内にあった物を使用しています。

実際人狩りさん（PK）も衛兵にばれないで辿り着けば食事が出るようです（目の前で食べてました）。当たり前前に食事を提供しているマイゾーグさんの優しい心づかいに感動です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4182y/>

冒険者かく語りき

2011年11月21日20時52分発行